

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1992 10



第91巻 第10号 日本幼稚園協会

# ウォーリーの絵本

大人も子どももいっしょに楽しめる、ウォーリー探しの絵本、人気爆発中。



## ウォーリーのおおきなすてきなポスターブック

大きな画面のポスター判なので、大勢でウォーリー探しが楽しめます。また、各ページにミシン線がついているので、切り離して壁に飾ることもできます。遊び方は既刊4冊と同じです。

ウォーリーと悪役オズローを探せ！

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳  
53cm×38cm・11場面 定価2,500円(税込)

### ①ウォーリーをさがせ！



ウォーリーを探せ / ウォーリーの落とし物を探せ！ 261回楽しめるウォーリーの追跡パズル絵本です。

- ・日本図書館協会選定図書
- ・全国学校図書館協議会選定図書

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳  
大型判・26頁・定価1,300円(税込)

### ②タイムトラベラーウォーリーをおえ！



石器時代、ローマ時代などにウォーリーがタイムトリップ。ウォーリーと彼の落した本を探そう！パズル絵本です。

- ・日本図書館協会選定図書
- ・全国学校図書館協議会選定図書

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳  
大型判・26頁・定価1,300円(税込)

### ③ウォーリーのふしぎなたび



ウォーリーは世にも不思議な旅に出た。ウォーリーの秘密が記されている巻物を探そう！パズル絵本です。

- ・日本図書館協会選定図書
- ・全国学校図書館協議会選定図書

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳  
大型判・26頁・定価1,300円(税込)

### ④ウォーリーのおもしろゲームブック



ウォーリー追跡隊のみなさん！ぐちゃぐちゃになるほど探すものがあるよ。ゆつくり楽しんでください。

- ・日本図書館協会選定図書
- ・全国学校図書館協議会選定図書

マーチン・ハンドフォード/作・絵 唐沢則幸/訳  
B5変型判・20頁・ふろく付・定価1,300円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

# 幼 児 の 教 育



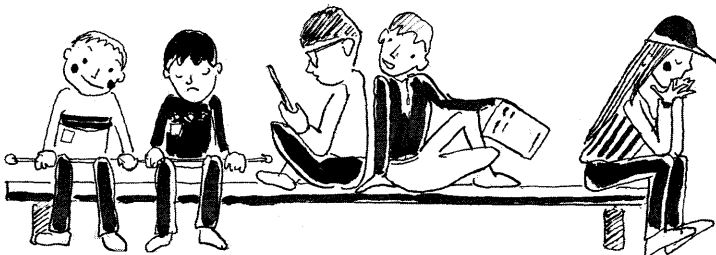
第91卷 第10号

# 幼児の教育 目次

## — 第九十一卷 第十号 —

© 1992  
日本幼稚園協会

写真・子供讃歌.....		(4)
△巻頭言▽早期教育は花盛り.....		藤永 保..... (6)
訓練.....		津守 真..... (8)
「生成」としての保育者存在 保育者になることの意味の考察.....		榎沢 良彦..... (13)
幼児期の総合的指導を求めて 図式期の基底線・基底面の描き方.....		浜田 美智..... (22)



シンポジウム「保育臨床の視点から園生活を考える」を終えて……大場 幸夫……(32)

婦人宣教師、ミセス・プラインの「おばあちゃんの手紙」(4)……小林 恵子……(40)

庭の番人ゝあきゝ 彩り・別れ………土橋 光子……(47)

ある日の育児日記から(22)………佐藤 和代……(52)

遊びのスクランブル交差点(5)

文字のある遊び おみせやさんごっこ………仲 明子……(53)

表紙・平野 清

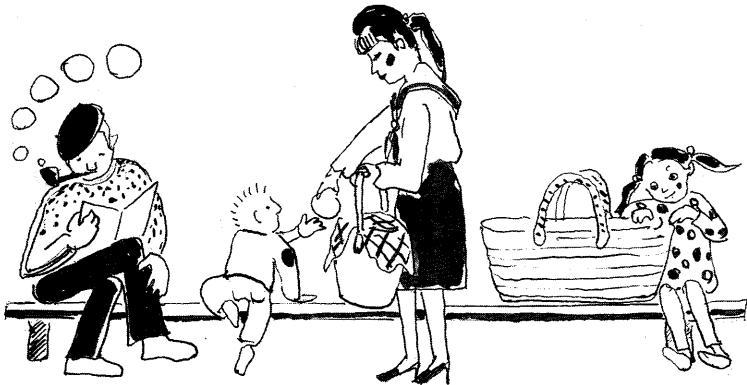
扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／吉岡 晶子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



# 子供讚歌



撮影・平野 清



大きなおいもが ここにもあるかな？

# 早教育は花盛り

藤永 保

近頃、私のような人間のところまで、早教育問題についてのインタビュー、原稿依頼、テレビ出演などの申し込みがしきりにやってくる。察するに、早教育は再びまたび一種のブームを迎えているのであろう。

これには、無理からぬ事情もある。近年、大都市の中心部では、急激な再開発に伴って、従来型の地域社会が姿を消してしまったところが多くなっている。高層ビル群の立ち並ぶ都心のアパート団地では、小さな遊び場は設けられてもほとんど人影をみないことすら多い。

このような状況では、母親も幼児もともに人間関係を失ってしまう。幼児期とは、家族という血のつながりをもった——その点では最も親密な集団のな

かの、しかも両親を始めとする大人たちにより一方的に保護されてきたそれまでの人間関係を卒業して、同年輩の仲間という新しい人間関係へと、次第に重点が移っていく時期だといえる。幼児は新しく獲得した技能や体力などを、同等な仲間と競い始め、そのことがまた次の成長へのステップを作っていく。

一方、「お祖母ちゃんの知恵」を失った母親にしても、子育ては万事心細い。同じ境遇の仲間を求めるのはごく自然なことである。こうして、母子ともに仲間を求めるとしたら、その場はいわゆる早教育の教室や施設が最も手早いということになる。教育投資にはさして不自由しないほどの経済成長をとげた今の日本の実情では、早教育の場こそが失われ



た地域社会の役割を果たしているといったら皮肉にきこえるだろうか。

こうかいてくると、上のためにこそ幼稚園や保育所があるのではないかという反問があるだろう。まったくそのとおりである。しかし、幼稚園や保育所には、こうした大都市中産階級の幼児教育上のニーズに対応しきれない点がおそらく二つある。第一は、乳幼児の発達加速や早熟化の傾向である。それを一方的に早熟化といってよいかどうかには問題もあるが、ここでは詳述するゆとりがない。ともかく、元気に成長し要求する二歳児に昼間の限られた時間、十分な活動の場を与える適当な施設は今のところ見当たらない。最近では、二歳児どころか零歳児に英語を教える塾があるというのも驚きであるが、要するに、塾産業にあっても早期化の傾向はますます加速されていくであろうと予測できる。

もう一つは、いうまでもないが、高学歴取得と受

験競争に伴う早期からの知的教育の要望である。筆者は、学校教育を先取りするような技能教育を「知的教育」とは考えないし、そのような固定観念が日本の教育の現況を毒する最大の偏りだと考える者であるが、日本の社会全体の功利主義化の風潮とともに、「知的教育化」も止め難いことを痛感させられざるをえない。

おそらく、今後の早教育は二つの方向に分極化していくだろう。一つは、仲間を求める場としてのそれであり、スポーツ教室のようなものが典型となる。もう一つは、先取り知的教育であり、英語・算数・国語教室等々の花盛りは指摘するまでもない。しかし、何れにしても、その条件や根拠をよくよく見定めて適切な運営に力を注がなければ、空しい仇花に終わってしまうのではなからうか。自他ともに心したいものである。

(国際基督教大学)

# 訓練

津守 真

K子は大人に抱かれて、こちらの部屋からあちらの部屋へと歩いてゆかせる。静かな場所にゆきたがることもあるし、皆が遊んでいる傍にゆくこともあるが、私は折があれば皆が遊んでいる場所に誘いたいと思っていた。ある日、母親が迎えにきていた帰り際、トンボリンにつかまって立っていたK子が、急に発作を起こした。急いで傍にゆき支えているうちにK子は眠った。そのわきで母親が遠慮がちに言うのには、あのとき元気の良い子が二人つかみ合いをして大声をあげており、周囲は子どもたちの激しい動きや声にざわめいていた、この子は賑やかな場所が苦手なのですと。この日、K子が急に発作を起こしたのも、その騒音のためではないかと思うとのことだった。私は、K子が大人に抱かれて二

人きりになれる場所を好むことには気付いていたが、自分の本来の静かな動きが妨げられたときに、それが発作の引き金になる程だとは思っていなかった。その次の朝から、私共はK子を穏やかな気持ちで迎え、心も動作も静かに一日を進めるように心がけた。そうすると、この子のどこまでも穏やかな生活感覚がこちらに伝わってくる。そんな経過の後には、K子の方から賑やかな空間を選んでゆくこともあって、そのようなときには発作を起こさない。子どもの本来の生命的な動きを察知しつつ関係を作ってゆくことによって、新たな活動の場が生み出されることを知ることができた。

その頃、何人かの方から、歩行、食事、排泄、言語等の分野で、子どもが嫌がっても、必要な訓練をしないと、能力が伸びないのではないかとの質問を受けた。私はいつもそういう質問になかなかうまく答えられない。

こんなことを考えていたとき、Mくんの食事の場面に出会った。その子はこれまで手を使うことがほとんどなかったのだが、いま、食物を両手でつかみ、顔や手に一杯ごはんをつけて食べている。手を口にもってゆくものも的確でなかったのだが、こうして食べているときには何割かは着実に口の中に入っている。また、片方の手で弁当箱のへりをつかみ、もう一方の手で中味を出したり、弁当箱の内側をなでまわしている。容器には内部と外部があることを触覚で学んでいるのである。

私は、いつかこの子が自分の手で食物を口に持ってゆく日があることを待ち望んでいた。しかし、その時がくる前に、食事の部分だけを取り出して訓練の時間を設ける必要はないと考えていた。プライドの高いこの子は、その時期には、大威張りで大人から食べさせてもらうことによって、対等な人間関係を経験しているように思えた。そうしているうちに、ある日、この子は自分の手で食物をいじり、口にもってゆくのが面白くなった。その意欲的な姿は目をみはる程で、子どもは自分で必要な時を選んで、集中的に自己訓練をしている。そして、食事と同時に、人間関係も、周囲の状況判断も、あわせて学んでいる。

同じようなことを考えさせられる機会は相次いで起こるものである。

今年の三月に卒業したY子の中学校の先生がこられたとき、その先生が言われるには、Y子は写真を見て状況を理解し行動するのが得意だが、小学校のときにはどのようにして訓練したのかということであった。私ははじめ意味を理解しかねたのであるが、それは私共が順序段階を追って写真教材を提供する訓練を行ったのであろうという前提に立っての質問であった。私はそういう風に考えたことがないことを述べ、写真とY子とのかわわりを話した。

私の机のひき出しには、いろいろの写真が入っている。Y子は三、四年生のころから、

自分の知っている子どもの写真をとり出し、それをじっと眺め、何度もさわわり、しまいはなめたりしていた。そのうちに写真は破れてばらばらになるのだが、私は毎日ひき出しに写真をいれておいた。何か月もそれはつづいた。私だけでなく、他の職員たちも同じように自分のひき出しにわざわざ写真を入れているようだった。私共の学校では、通知表のかわりに子どもごとに毎学期アルバムを作り、それに担任のコメントをつけるようにしている。どの子どもこのアルバムは好きだが、Y子のアルバムは、夏休みや冬休みが明ける頃には原形をとどめない程になるのが常であった。こういう生活の中でY子の写真による状況判断と認識は育っていった。それは私共とY子との間の関係のできごとであって、その結果を目標にした訓練とはちがう。

Y子についてはもうひとつ顕著なことがある。Y子には右手の麻痺があり、右手で掴むことができない。しかし、Y子はやろうと思うときには不自由な右手の甲と口を使って実に上手にやる。きれいな色の小さなビーズに糸に通したり、刺しゅうをしたりする。数年前に整形外科の専門医が来られたときは、Y子の様子を見て、この調子で生活していれば特別な訓練は必要ないと言われたことに私共が励まされもしたのだが。いずれも、訓練という観点から見ると、子ども自身が自らに課している最も効率のよい訓練と言えよう。子ども自身がその意味を理解し、意欲をもって取り組むときには訓練は意味をもつが、そのことなしに、大人からみて望ましい目標に向かって他律的に訓練することは、そ

の子どもの固有の生命的な動きを妨げることになるだろう。そういうときの子どもの顔には輝きが見られない。

訓練ということを考えるときにも、子どもを対象として取り出すか、あるいは、人間同士の関係としてみるかによって、その実際は大いに異なる。

(愛育養護学校)



# 「生成」としての保育者存在

## 保育者になることの意味の考察

榎沢 良彦

はじめに

日常、私たちは「保育者であること」を職業的役柄としてとらえていることが多い。それは、例えば、親が自分の子どものクラス担任と園外で出会ったときでも、その人を「先生」と呼ぶことに端的に現れている。

このように、保育者を一つの職業としてとらえる限り、保育者であることは、子どもの発達について専門的知識を有していることであるとか、ピアノが弾けることであるとか、子どもの世話をする技術に優れていることである等と考えられる。しかし、このような保育者が所

有すべき条件は本質的なものではない。なぜなら、たとえピアノが弾けなくとも、子どもを保育することはできるからである。

「保育者であること」は人間の可能的在り方の一つなのであり、他者との関係の内に生きる一つの生き方なのである。そのことを見失うと、「保育」というものが単なる技術の問題（保育者が子どもを思うように操る問題）に墮する危険性が生じる。

私は今日まで「保育者であること」の本質を探究してきたのだが、私たちが「保育者である」前に「保育者に

なる（保育者へと生成する）」段階が存在する。そこで、本稿では、「保育者であること」と密接に関連している同次元の問題である「保育者になること」の本質と意味を明らかにすることを試みることにする。

ところで、この問題を明らかにするには、一個の人間が保育者になる事態、保育者になる現象に私たちが立ち会わなければならない。言い換えれば、保育者になるという「体験相」を注視しなければならないのである。そのため、私自身が保育実践を行ない、その体験を反省的に考察することにより、「保育者になること」の意味を明らかにするという研究アプローチをとることにする。実際に考察の素材とするのは、私の体験を定着した「私自身の実践記録」である。因に、このようなアプローチによる研究を私は「実践的研究」と呼ぶことにしている。

## 一、保育者へと生成する過程

### (一) S男、Y子と私の関わりの実際

本稿では二人の知恵遅れの児童（S男とY子）を事例として取り上げるのだが、特に問題にされるのはこの二人の児童と保育者である私との関わりである。そこで、この関わりを理解するための前提として、二人の児童と私との関係を簡単に述べておこう。

私はこの二人の児童の担任の一人であり、よく一緒に遊んでいる。したがって、この二人と私とは「親しい間柄」にあると言ってさしつかえない。

\*

〔記録1〕（S男とY子とI先生のいる校長室に私が入って行く）

校長室で、I先生（女性・S男とY子の担任）がS男とY子の相手をしていた。I先生の両側にS男とY子が座り、S男はお弁当を食べていた。私は手が空いたので、三人のいる校長室に入って行った。

S男は椅子に座り、ニコニコと楽しそうな表情でお弁当を食べており、Y子も穏やかな表情をしており、校長室は「和やかな雰囲気」に満ちている。私は少しのちゅうちゅ



もせず、校長室に入っていく。S男とI先生の「好意的な視線」が私に向けられ、私を迎え入れてくれる。Y子はまだ私に気付いていない。私は笑みを浮かべてS男の正面辺りに座る。そして「Y子ちゃん、こんには」と身を乗り出すようにしてY子に挨拶する。I先生の方に向いていたY子は私に気付き、こちらに振り向くと、ニコッと微笑む。これでこの部屋の三人すべてが私の存在に気付き、私を受け入れてくれたのだ。

\*

### 〔記録2〕（私がI先生と交替してS男と遊ぶ）

私はI先生から、後で自分と代わってS男についてくれるようにと頼まれていた。

S男とI先生は校庭の中程で、古タイヤのロープウェイで遊ぼうとしていた。私は広間からI先生に「Y子が来ました」と大きな声で知らせる。I先生は「それじゃ交替するわ。Sちゃんに付いてやって」と答える。私は明るい気分二人に近づく。I先生はS男に「Sちゃん、今度は榎沢先生が遊んでくれるって。よかったわね」と話しかける。S男は「わかった」と言うように軽くうなずく。S男

と私はいつも一緒に遊んでいるので、I先生と私が交替することをS男は快く認めてくれるだろうと思っただけが、実際にS男がうなずいてくれたことで、私はほっとした。

S男はタイヤに座り、私にロープを持って動かすようにと頼む。私は「じゃ、引っ張るぞ。ヨイショ！ヨイショ！」と、多少おどけた調子で答える。「行くぞ！」と言ってロープを緩めると、タイヤが低い方へと滑って行く。S男は嬉しそうに笑っている。私は「よし、また行くよ」と積極的にS男に話しかける。私は明るい気持ちで意欲的になっているので、積極的に行動してしまうのだ。それに、S男の嬉しそうな笑顔が私をさらに楽しい気分にしてくれる。

### (二) 保育者へと生成する過程

以上に提示した二つの事実に基づきながら、私たちが「保育者」へと生成する過程を考察するのだが、以下に取り出す諸項がすべてこの順序で生じたり、作用するわ

けではない。論理的には順序があっても、現象的には同時に生じるといふこともあるのである。したがって、以下の諸項は「保育者生成の諸契機」と考えてもらいたい。

① 実現されていない投企された役割存在（未在の役割存在）

私が前提にする考え方は、「子ども」とか「保育者」という概念は関係論的概念<sup>①</sup>である、ということである。すなわち、私たちは子どもとある実的な関係を結ぶことにより、初めて「保育者」なる役割を担った存在<sup>②</sup>になるのであり、同時にまた子どもも「子ども」なる役割を担った存在になるのである。

ところで、現実においては、私たちは実際に子どもと関わる（関係を結ぶ）以前から、保育的状況に身をおくことで——ときには出勤途中においてさえ——すでに、「保育者」であろうとしている。すなわち、自己の存在可能の一つとして保育者存在を投企している（自己の在

り方を未来に向かって投げ企てている）のである。しかし、これだけでは私たちはまだ保育者ではない。私が保育者でありうるためには、私に保育者であることを期待し、私の投企を承認する子どもがいなければならない。すなわち、子どもとの間に実的な関わりが生じるまでは私の投企は空虚なままであって、充実しないのである。



したがって、この段階では私たちは△未来の保育者存在✓を生きている、と言えるだろう。

例えば、「記録1」で校長室に入って行こうとしている私は、この時点ではこの子どもとも関わっていないのだから、保育者ではない。しかし、わたしは校長室にいるS男とY子を念頭に置いており、この二人と関わるであろうことを予期している。すなわち、私は現実には保育者ではないが保育者であることを投企しているのである。それゆえ、私は△未来の保育者存在✓を生きているのである。この事態は「記録2」においても同様である。

この未来の保育者存在を生きる、という事態は初めて保育実践をする人を見ればよく理解できるだろう。実践経験の乏しい実習生は実践現場に臨む前から、「子どもに会ったらこんな風に話しかけよう」とか、「子どもともうまく遊べるだろうか」等と考え、期待と不安にとらわれ、緊張してしまうものである。このように思ってしまふこと自体、実習生が保育者としての自己の未来の姿を

予想していることを意味するのであり、それはまさしく、未来の保育者存在の状態を生きていることを意味するのである。

② 経験により物象化された「子ども存在」と「保育者存在」

私たちが保育者へと生成して行くことを可能にする一つの契機が△役割存在の物象化✓である。これは、役割存在をあたかも「事物存在」と同じように、他者との関係ぬきに、「それ自体で存在するもの」であるかのように思ってしまうことである。<sup>3)</sup>

私たちの日常的で素朴な意識においては、この「物象化」という事態がごく自然なこととして起きている。例えば、私たちは保育者が毎日習慣的に行うべき仕事をイメージとして思い浮かべることができる。イメージ化された仕事は子どもとの実的関わりから切り離されたものである。すなわち、それは物象化の所産である。私たちの日常的な行動の多くは物象化されたものなのである。<sup>4)</sup>

ある関係を物象化するという意識の働きは保育者においても生じる。保育者はこれまで繰り返し自分が「保育者」として生きてきた経験（子どもと関わり合ってきた経験）から、自分はいつでも「保育者」であり、子どもはいつでも「子ども」であると思ひ込んでしまう。言い換えれば、「子ども―保育者関係」が常時存在し続けているかのように思ってしまうのである。「子ども―保育者関係」を物象化してしまつた保育物は、私を「保育物」として規定してくれる子どもの存在と関係なく、保育者としての役割を、それがあたかも「もの」でもあるかのように、自分が所有していると思ってしまうのである。

例えば、「記録1」において私は何のちゅうちょもせずS男とY子のいる校長室に入つて行った。それは私が二人の担任であり、これまで二人と親しく関わってきたという経験があるために、この場面でも当然私を受け入れてくれるだろう（保育者として認めてくれるだろう）と思つていたからである。すなわち、二人との間に実的

な関係が生じる前に、二人と私との間に「子ども―保育者関係」が成立しているかのように思つていたからである。私は、S男とY子は「子ども存在」であり、私は「保育者存在」であることをすでにある程度前提にして行動していたのである。

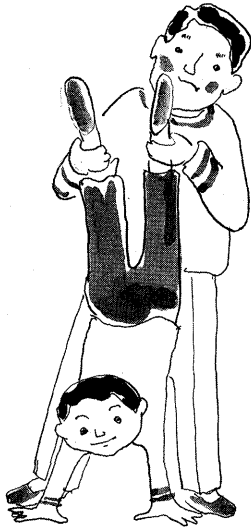
この事態は「記録2」においても同様である。この場面では、I先生と私が交替することをS男が認めてくれるだろう、と私は思つていた。これまで私は何度となくS男と遊んできたので、いつでもS男は私と遊んでくれる（いつでもS男は私にとって「子ども存在」である）とほとんど確信していたのである。このように私が思えるのは、「子ども」と「保育者」という役割存在を、すでに成立しているものとして、私が物象化してとらえていることによつていのである。

日常的な保育実践においては、この△役割存在の物象化√・△関係の物象化√というものが、私たちが子どもに関わつて行くことをある程度支えてくれている、と言えるだろう。すなわち、保育者は、これまでの保育者と

しての経験に支えられて、新たな自己投企（新たに保育者であろうとすること）を繰り返しているのである。

### ③ 受容的雰囲気感知

私たちが保育者たらんと投企し、子どもと関わろうとする際、身体的実存の次元（前意識的次元）において、



それを支えているのが「受容的雰囲気」である。私たちは子どもが私を受け入れてくれるか否かを（保育者になれるか否かを）、「雰囲気」として感知するのであり、この「受容的雰囲気」に支えられて保育者としての自己投企を維持することができるのである。

〔記録1〕において、私が入って行くところとしていた校長室は「和やかな雰囲気」に満ちていた。そこにいる三人は穏やかな表情をして寛いでいた。そのような身体在り方は「世界に対する親密性」を示すものであり、第三者の到来を受け入れる用意のあることを意味しているのである。このような他者を受容する態度が「雰囲気」としてその場に漂い、それを私の身体が感知したのである。それゆえ、私も寛いだ気分が安心して（保育者になれると期待して）校長室に入って行けたのである。

このように、「受容的雰囲気」は保育者としての自己投企の実現を、より確実なものと思わせてくれるのである。

④ 子どもとの出会いにより実現される役割存在（保育者の生成）

〔記録1〕で△未来の保育者存在▽を生きていた私が△現在の保育者存在▽になったのは、校長室にいた三人の「好意的まなざし」（△受容的まなざし▽）に出会った瞬間だった。

ところで、「他者との出会い」とは必ずしも「まなざし」だけによるわけではない。まなざしをその一部とする「身体そのもの」により、私たちは他者と出会うのである。例えば、子どもが私を見ていなくとも、身体所作などにより私に働きかけるなり応答してくれば、そのとき私は「保育者」になれるのである。したがって、保育者の生成を可能にするのは△子どもとの身体的出会い▽である、と行うことができるだろう。

## 二、保育者へと生成すること

以上の考察より、次のように言うことができるだろう。

第一に、保育者とは事物のように存在しているのではなく、絶えず保育者へと生成して行く存在なのであり、そうでない限り保育者ではありえないのである。つまり、「生成の運動」の内にのみ保育者は存在するのである。

第二に、子どもとの出会いにより保育者存在が生成するのであるから、保育者は常に子どもとの出会いにおいて△自己の存在を賭けている▽と言える。

第三に、私たちは「保育者」として生成しえているとき、「生きいきと行動する」ことができる。例えば、〔記録2〕で、保育者になりえた私は楽しい気分に包まれ、生きいきと活動していた。このとき私はS男の所有物として支配されていたのではなく、△私自身の主人公▽となっていたと言えよう。すなわち、「保育者」であるとき、私たちは△主体的存在▽として存在しうるのである。

第四に、保育者が「保育者」としてその主体性を発揮して存在しうるのは、子どもとの出会いによっている。

したがって、子どもは△主体的存在としての保育者存在の不可欠な契機▽である、と言える。

以上、保育者生成の過程とその意味を私の体験相に即して考察してきた。「子ども」と「保育者」が関係的存在である以上、ここで論じたことはそのまま子どもについても言える。すなわち、子どももまた△子どもへと生成する存在▽なのである。

(母子愛育会)

### △注▽

(1) 哲学者の廣松渉は「実体」に対する「関係」の第一次性を説いている。すなわち、関係の発生によって初めて実体の存在が可能になるのである。 廣松渉『存在と意味』岩波書店 一九八二年 四六八頁

(2) 保育者を「役割を担った存在」と言うと、まるで保育者は遂行すべき義務として保育を行っているように思えるかも知れない。ここで言う「役割」とは「仕事」という狭い意

味ではなく、相手との関係により行われる社会的行動一般のことである。 廣松渉『物象化論の構図』岩波書店 一九八三年 二九〇、二九一頁を参照

(3) 廣松によると、「物象化」にはいくつかの意味があるのだが、そのうちの一つは、人間と人間との間主体的な関係が物の性質であるかのように見なされることである。注(2)と同書 六五、六六頁

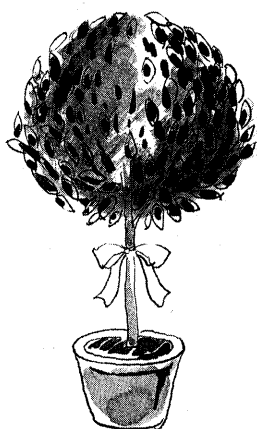
(4) 小林敏明によれば、日常生活の社会的行動はほとんど関係が物象化された役割行動なのである。小林敏明『八ことなり▽の現象学』弘文堂 一九八七年 四六頁

(5) この考え方はメルロ＝ポンティに発するものである。私たちの「身体的存在」は「意識的主体」に先立って世界と交わっている。意識に先立つという意味で、身体的存在は「前意識的次元」のものである。「世界と前意識的に交わる」ということは、「世界と渾然一体となっている」ということである。クワント(滝浦・竹本・箱石)『メルロ＝ポンティの現象学的哲学』国文社 一九七六年 四六、四八頁を参照

# 幼児期の総合的指導を求めて

## Ⅱ 図式期の基底線・基底面の描き方

浜田 美智



### I. 研究の目的

幼児期の「描く」行為は、生活の中でごく自然に自発的なかたちで始められる。彼らは描くことから、表現による開放感と充実感を体験する。私たちはこの様にして描かれた幼児画を全面的に受け入れ、絵に現れている彼らの思考や、心の微妙な動きを読みとり、幼児期の行動

を理解するための手掛かりをつかみたいと考えている。

幼児は五〜六歳頃になると、紙面の下部に一本の横線を引き（基底線）その線上に人物や家や動物を直立させ並べ描きする。この描き方は、事物を紙面に存在させるために、描く場所の必要性を空間的に自覚した証である。この様に幼児が画面に基底線を描くことは、前図式期から図式期への移行を示すサインとして既に認められ



ているが、今回は特に五歳児の絵を観察していると、さまざまな基底線の描き方に気付き興味をもった。同時にこの様な描き方は発達上、どのような意味を持っているのであろうか。

本研究は、特に図式期に出現する基底線や基底面の描き方に注目し、発達上の意味合いについて考察する。

## Ⅱ 研究の方法

### 1. 調査内容及び方法について

- (1) 個人別に自由画帳の絵を全て写しとる。
- (2) 絵の特徴について、次の要因から考察する。
  - i 絵の発達の程度。
  - ii 描いている形象や線の伸びやかさ、筆圧の強弱の程度、紙面使用のバランスの程度。
  - iii 描いている枚数。
  - iv 二歳児からの絵との比較。

v 園での遊びの様子や友人関係と親子関係（特に母子関係）

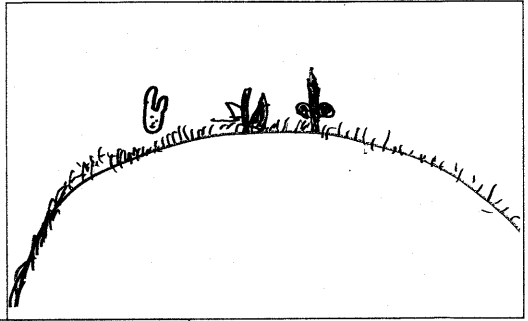
### 2. 調査の対象と調査期間

A園の五歳児（'85年4月～'86年3月生まれ）の25名（女児12名、男児13名）で、三年保育と四年保育を対象児とする。

調査の期間は、'91年4月から8月までの期間に自由画帳に描いた五三五枚の絵を対象とする。今回は特に五歳児の絵を対象にしているが、二歳から四歳頃に描いた描画も参考資料とする。

## Ⅲ. 結果と考察

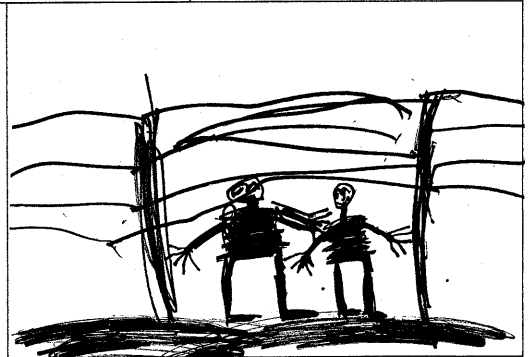
対象児25名は、全員図式期の絵であることが確認できた。彼らの基底線や基底面の描き方については次のような特徴がみられた。



▼图2 R子 5.9



▲图1 E子 5.8



▼图4 J子 5.8



▲图3 E夫 5.7

## 1. 基底線の描き方

図1から図4の絵は、何れも基底線を描いている。図1のE子は、最近特に目立って絵本や童話に熱中する様になると、次第に行動面にも落ち着きが見られるようになる。紙面中央にくっきり半円形の基底線を描き、その線上に草花を丁寧になべ描きしている。

図2のR子は、仲良しグループに入り安定し自己を前面に出すようになった。R子の絵からは、本児の散歩している中央の伸びやかな線と、空に輝いている太陽に内面の幸せな感情を読みとることができる。

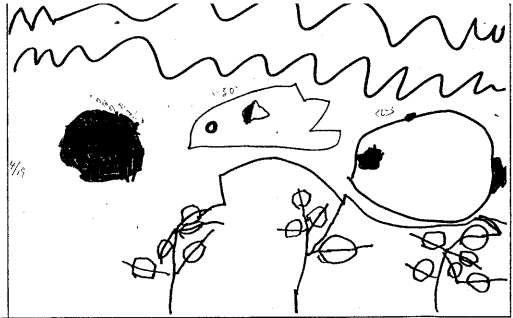
図3のE夫は、減多に絵を描かないが、じっくり取り組んで描いていることがわかる。基底線上の二人の男児は大地にしっかり立ち、頭部・首・胴体・二本の腕と五本の指・二本の脚は細部まで描き完成した正面人物像である。

図4は園での縄跳び遊びの再現で、線上にJ子の仲良しの友達がいって中央に太陽を描き、本児の安定した気持ちがそのまま画面に現れていて、E夫の絵と同様に完成し

た人物像である。以上のように4枚の絵には、上下の空間を規定する一定の軸の存在により空間関係を固定して描いていることがわかる。

▼図5 O夫 5.7





▲図6 A夫 5.9

▼図7 O子 6.4



## 2. 基底面の存在

今回の調査の結果から、五歳児の絵には基底線と同様に、基底面の存在が確認された。

図5のO夫は、園内に生息している昆虫に興味を持ち、採集や飼育に熱中し始めると、行動面にもこれまでと違って自信が見えてきた。最近のO夫の絵には図5の様な力強い筆圧で大胆に描く絵が多い。この絵は紙面の半分を塗り潰し面として捉えている。左上の太陽や、中央の地平線上のトンネル型の三角形は、画面のバランスを保ち、本児の内面の安定感がそのまま現れているようである。

図6も同様に海中を面として捉えている。海中にはコングが生え、魚の卵やイルカ、くじらが泳ぎ上部には波が立っている。本児は綾取りや折紙の名人で、A夫の几帳面さが絵によく現れている。

図7の「兎さんが水の上で寝ているの」は、O子を中心に二羽の兎が波乗りしている絵である。本児は入園当時から緊張感が強く、園になじみにかかったが、最近の

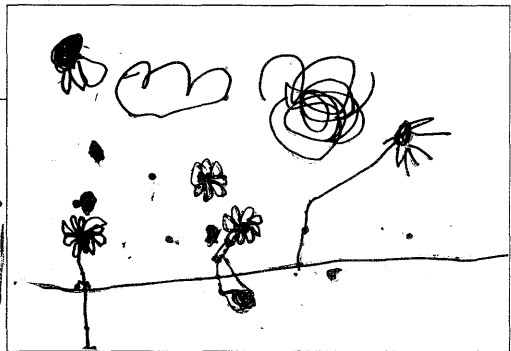
○子は見違える様に元気になった。二羽の兎は水の基底面に寝ていて波と平行に描いているが、○子の位置は兎と異なった面空間にいる。緊張感から開放された○子は、自由な気持で描き易い独自の方法で描いていることがわかる。

このように、基底面は紙面全体や一部の面を意識しながら描いていること、また幼児が描こうとするテーマの内容を最も描き易い幼児独自の手段を用いていることがわかる。このような独自の描き方を発達面から見ることにする。

### 3. 幼児独自の視点による描き方

基底線や基底面の出現を発達の側面から考察するために、K夫・S<sub>n</sub>子・m子の絵について一年前に描いた絵と比較する。

図8のK夫の二枚の絵を比較すると、前者は一本の基底線上に花を描き、その上に雲と太陽を描いていることから、K夫は上下の空間意識のもとに描いていることが



▲図8-1 K夫 5.3

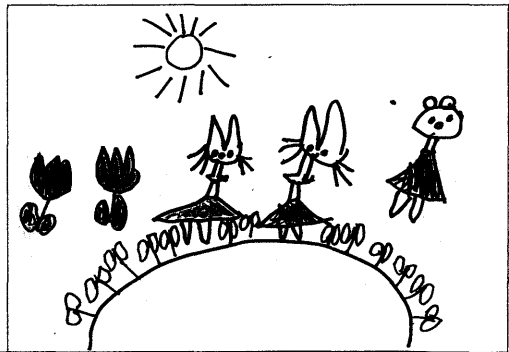


▼図8-2 K夫 6.4

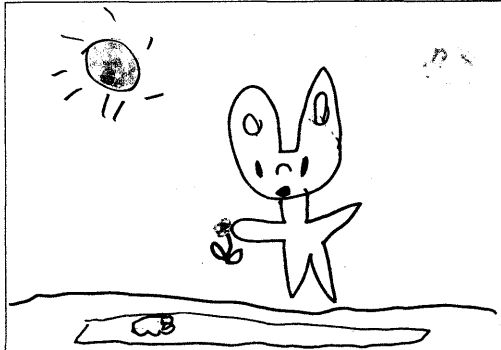
明らかである。約一年後の後者の絵は、陸地にK夫が立ち、海をゆく船は水平線（大人とは逆方向）を基準に視点を移動させて描いている。この描法は一般に展開描法と呼ばれ、幼児画の特徴の一つに数えられている。本児は親子関係もよく心身共に良好な状況にあり、本児の絵には子どもらしい伸びやかな絵が多く、自分らしさを素直に表現している。

図9のS<sub>n</sub>子の二枚の絵を比較すると、前者は半円形の基底線の上に兎は立っているが、動物とチューリップは他の面に位置していて、基底線と基底面を同時に描いている。丁度一年後の絵は、兎が水に映った自分の姿を眺めている絵であり、この絵面には上下の空間と前後を規定する空間の二つの観面が存在している。描画の得意なS<sub>n</sub>子は、アイディアのあるお話の絵が多い。この一枚も兎シリーズの絵話の一枚であり、本児の自由な発想と独自の表現がそのまま絵に現れている例である。

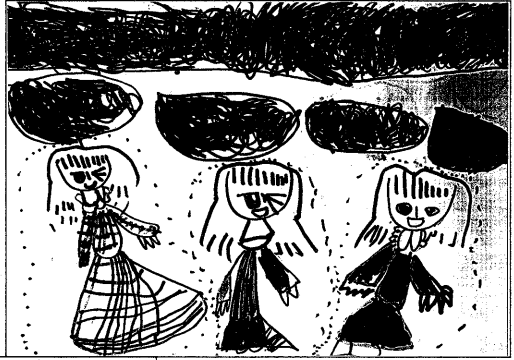
図10のm子の二枚の絵を比較すると、前者は、紙面の底辺を基底線に見立てその線上に三人の女兒を、上部に



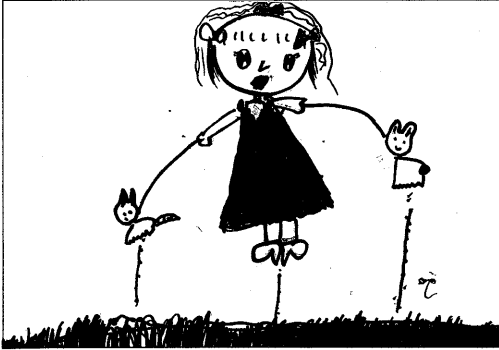
▼図9-2 S<sub>n</sub>子 6.2



▲図9-1 S<sub>n</sub>子 5.2



▼図10-2 m子 5.6

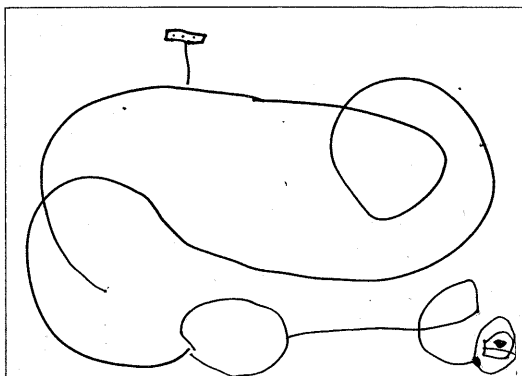


▲図10-1 m子 4.7

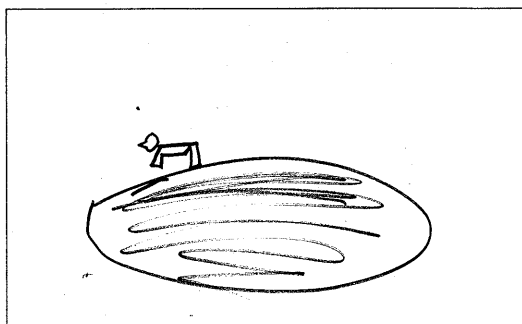
空と雲を描いている。後者の絵は、m子が二匹の犬を連れていているが三者は一斉にジャンプした格好になっている。m子は最初に基底線である道を描き、その後、人物を頭部から描き始めたため、m子と二匹の犬は基底線から離れてしまった。そこで三者と基底線を垂直線で結ぶ工夫をしたのである。この描法はとても自然であり、ユーモラスである。m子は日常の生活に於いても友人が多く、特に運動能力が高く、遊びは活発でバラエティーに富んでいる。

以上の三例から、前者の単純な上下空間意識より始まり、年齢と共に空間に対する意識が複雑化していることがわかる。つまりK夫の絵からは視点の移動による描法を、S<sub>0</sub>子の絵には上下と前後の二つの空間の観面を、更にm子の絵には自由な独自の描法で描かれている。又m<sub>y</sub>やY子の二人の絵にも独特な描法が見られる。

図11・図12のm<sub>y</sub>は、あまり目立たない存在であるが、知的で発想豊かな女兒である。図11は、父親と車で通る道路を一本の線で現している。本児の視点は紙面を自由



▲図11 my 5.11



▲図12 my 6.1



▲図13 Y子 6.2

に移動しているが、常に基底線（紙面の底辺）に平行に描いている。

図12は、プールサイドを基底線として、横向きの人物形象をリアルに捉え、本児の身体は泳いでゆく方向性を示している。またプールは面として捉えていて、ここに於

いても観面混合の描法が見られる。

最後に図13のY子の絵に注目したい。本児が平均台を渡っている様子を、仲良しの友人宛に描いた手紙である。よく見るとY子は複雑な視点から描いていることがわかる。まず平均台を支えている二個の積木は、紙面の



底辺の基底線に平行に置いているが、Y子の渡っている平均台とした一本の線は傾斜している。この傾斜した線は、左右と前後の空間を意識すると共に、本児の進行してゆく方向性を現し、力動性を感じさせる。Y子は右足を着地させ、太い両腕は全体のバランスを保つために遅しく、指先にまで力が漲っていて基底線に平行に描いた二本の腕も方向性を指していることがわかる。

以上、基底線や基底面は年齢と共に独自の描法により、複雑化してゆく過程を確認することができた。更にこの様な独自の描き方をする子ども達は、日常の遊びや生活の面に於いても、自ら自発的に生きいき行動している子ども達であることが確認された。

既に教育要領にも述べられている様に、幼児期は生活と遊離した特定の技能を身につけさせるのではなく、自分の気持や考えを、素材に素直に表現することを重視している。そして日常生活の中で子ども達が、自由に人や物と関わることにより、確かに成長してゆく姿を、本研究から確認することができた。

最後に、長期間にわたり、本研究の為に資料を提供して下さいました、高知市石立保育園の村田澄江園長や諸先生方、何時も楽しい絵を見せてくれました園児の皆さまに、心からお礼申し上げます。

(高知女子大学保育短期大学部)

#### 参考文献

鬼丸吉弘著『児童画のロゴス——身体性と視覚——』勁草書房 一九九〇

## シンポジウム 「保育臨床の視点から

### 園生活を考える」を終えて

大場 幸夫

私がこの概念「保育臨床」を使用したのは、公には日本教育心理学会第31回総会の小講演（一九八九年）の主題「保育臨床の成立と課題」が初めてのことであった。

それ以前に、この分野を示唆されるような概念を使用する先行研究は見あたらない。自分の専門とする仕事の経緯では、かねてから「教育臨床」という分野が成立していることを知っていたので、その後の自分の研究的関心が、保育現場の問題に絞られるようになって、しばしばこの「保育臨床」という分野の成立を予感してきた。

確かに、自分にとって身近に感じつつまた自分の仕事として手を染めて来もした心理臨床の分野は、保育実践に関係の深いものとして成立していた。とはいうものの、かつての入所施設における心理判定という自分の仕事は、まさに心理検査を子どもたちに施行してその結果の記録をきちんととどめるといふ繰り返しに過ぎなかった。結局、子どもの24時間を身近にしつつ、実際には検査器具を介しての子どもと向かい合う日々でしかなかった。子どもとのかかわりの薄い出会いに終わらせてき

た。子どもたちから見れば、当時の私は近くにいなから遠い存在であつただろう。

その後保育者の現場の悩みを少しでも軽減し、子どもとのかかわりをよりよい方向に発展させることを実現するために、ともに考え合う時間をもつことを、巡回相談という形で実現できるようにした。その模索を続けてきたこの十五年間の過程で、発想が次第にある方向に定まって来つつあるという実感を、この「保育臨床」に覚えはじめたのである。それは単に心理臨床の応用の場という角度からの保育への接近ではない。保育実践そのものを保育者と語り合うとき、実践がいかに臨床的な意味を有するものであることかと考えさせられ、その意味づけを探してきたのである。

さる五月十六日（土）に、日本保育学会第45回大会企画シンポジウムIが開催された。今回のテーマは「保育臨床の視点から園生活を考える」と題している。保育臨

床という概念が使用され当学会で研究発表されたり、こうしたシンポジウムの主題に登場するのは、初めてのことでないかと思う。

ここで、このシンポジウムに話題提供者・指定討論者として参加していただけたのは次の方々である。前原寛氏（鹿児島県、安良保育園園長）、原和夫氏（塩尻めぐみ幼稚園園長）、小川博久氏（東京学芸大学教授）、山崖俊子氏（津田塾大学助教授）。

シンポジウムで話し合われた詳細を、その経過報告の形でここに紹介することではなく、私の主観的な作業として、以下に整理させてもらうことにする。

その場合、現時点では、保育臨床という概念そのものの意味規定について考えることを前提としている。まず第一には、保育者にとって、自らの専門性の中で、保育実践の特質として、この臨床性に気づくことが意味のあるものとなるのではないか、という点に注目したい。この場合、専門の臨床性とは、子どもにかかわる自分のス

タンスの取り方、あるいは自分がどのように子どもの前に存在するのかという点に心を向ける必要があることを意味する。子どもの一番身近な存在であるはずの保育者が、本当に身近に存在する人物かどうか心に心を向けることが大事なことであり、留意されるのである。なぜ保育者の専門性としてこの臨床性に注目する際に、保育者自身のありようが問われるのか。その疑問に対する一つの答えは、子ども自身の潜在的な成長力や治癒力を最大限に高めるためには、子どもの身近な存在としての保育者のありようが大きな影響力を有するからに他ならない。

第二には、いま述べたような臨床の捉え方をすると、園生活における大人の存在と同じく、子どもの集団がもつ臨床的な意味に留意しておきたい。これは今後の興味深い課題として設定できるだろう。たとえば、発育上の問題を指摘される子どもが、保育の場で、周囲の人々の予想を超えるほどの成長を示す事例は非常に多い。どうしてそうなるのかという説明や解釈を抜きに、

子どもが仲間の中にとけ込んでいく過程で、目に見えて他の誰でもないその子らしさを現し始めて、一人の人間存在としての証しを示しはじめる。このような事実の中に、あるいはその園生活の過程において目に見えないメッセージをお互いに感じとりつつ、かわりを深め始める力動的な関係が成り立っているのではないか。そのように考えてみただけでも、その追求の姿勢はまさに臨床そのものであることに気づく。このあたりの考察を深めるためには、子どもの集団そのものの認識を既成の心理学や社会学の概念にとらわれず、子ども同士の力動的な交流そのものを感じ取れる、保育者ならではのスタンスからの発見と考察が待たれるところである。

第三に、心の表現としてのからだへの関心を一層深めることは、それだけでも新しい保育研究の課題であることを指摘できるだろう。保育内容「表現」における子どもの身体性への留意もさることながら、この「からだ」は多義的な含意をもって保育者にメッセージを発信す

る。そのうえ、保育者自身のありようをからだが語るのだとするなら、この時点において、すでに保育における「からだ」は、すぐれて臨床的なテーマを成立させることに気づかされる。からだが語るという表現をここでも用いているが、このあたりの研究的な意義は、早くから心理臨床の分野では注目されていた。にもかかわらず、その方面からさえ残念なことに保育実践に影響を与えるほどの情報になつてゐるとは認めがたい。近年になつて認知科学の研究分野から「からだ」に関する関心を喚起させられる報告が現れるようになってきたが、これもまた保育実践への影響は顕著ではない。本来こうしたからだへの関心は、保育のような実践的な分野でこそ深められていいはずなのである。それが必ずしもそう思えないのは、保育において「からだ」はあくまでも健康・運動という話題の対象でしかなかったためである。保育者にはからだというテーマは限られたものであったことになる。発想を変えることはなかなか容易ではないとい

うことの証しでもある。

第四に、保育者の援助という働きの捉え方を従来よりも深めて広める意義を認めることを指摘したい。この場合、子どもの主体的な活動を支えることに保育者の役割の主眼がおかれるようになって、あくまでもそのような活動を促進するような環境づくりに力を入れることが、保育者の専門的な役割として見直されてきているのである。

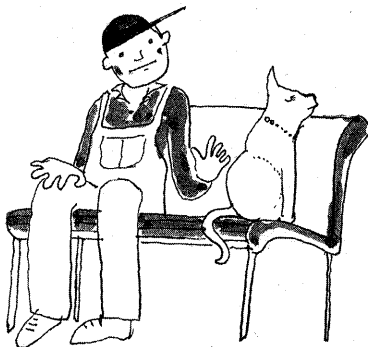
保育臨床という分野を成立させることの意義を認めるには、保育者の援助が他の専門的な役割を担う人たちとは異なる独自の仕事を展開し、しかもその特質において、すぐれて臨床的であることを証明することが必要である。保育実践は、子ども一人ひとりの内的な世界への配慮なしには成立し得ない。その点において、保育は明らかに臨床性の色合いの濃い専門分野の一つとみなしていいだろう。個別的な処遇への配慮といい、自分と子どもとの相互交渉の意義といい、いずれにしても本来の臨

床の姿を実践の中に見出すことは決して困難なことではない。しかも関係の改善による成長促進効果からみても、反対に関係の悪化が子どもの成長の妨害要因であることから、保育実践そのものが臨床的な意味合いの深い分野であることを、ここでも指摘することができる。

つまり、子どもらの発達リスクの主要因を人間相互の支え合いの歪曲や不足に見いだすことができることから、臨床的な対応を保育実践の過程に求めることが当然のこととして認められるだろう。「援助」概念が単に指導から援助に置き換えられたのではなく、保育者の根本的な姿勢そのものの変更になることを確認することが必要である。ヒューマン・サポート、つまり本来の意味を込めて、人間的な支え合いという素朴な営みもまたきわめて臨床的なものである。

第五には、保育実践における日常性の意味の問い直しを指摘しておきたい。この点はシンポジウムの席上、前原寛、原和夫両氏の実践をふまえた話題提供の中でも、

具体的な実例をあげての説明があった。いずれの話題も、日頃のなげない繰り返しあるいは自明のことほど自覚的に捉えにくい、というわれわれの体験と一致する。保育現場のケースカンファレンスや園内研修の課題



協議の場でも、保育者がいちばん自覚化の難しいのは、「何気ない毎日の繰り返し」である。いわゆる日常茶飯事がそれである。どうしたら日常化した知識や通常の感覚、あるいは定常的な思考法などそのものを問題にする気持ちになれるだろうか。近年のエスノメソドロジャー（いわゆる民族誌的方法）とは、われわれの生活のなかで獲得してきた日常的な知識や感性あるいは思考様式そのものを吟味するアプローチであり、一つの新しい保育実践研究法の開拓の可能性を有するものとして期待される。

保育実践の場が、子どもの生きる現場であることは、だれしも認めるところである。かりに、その園が秀でた実践をもって評価が高いと風評がたとうが、あるいは取り立てて強調できるような特別のことを何もしていないと噂されようが、子どもの生活がそこに営まれてきているという事実があることは間違いない。一方では、園児の家柄が喧伝されるような状況に今日でもあるという園

が、「保育の現場」として存続する事実を否定できないことは周知の通りである。他方では、環境の劣悪なために、登園さえ危ぶまれる家庭の子どもの事例が続出する状況にある園の存在することもまた事実である。現場では子どもの生きざまを目の当たりにすることを保育者は避けて通れない。子どもの生きざまを目の当たりにするところに、現場の特質もある。

要するに、日常性への留意とは、その主要な関心事が結局保育者の自覚化の問題として保育者自身のものの捉え方感じ方を問う方向へ向けられることである。日常性の問題に関していえば、自分が突き上げられるように激しいぶつかり合いを経験するでなく、問題を問題とも感ぜずに過ごそうと思えばそうなることは明らかである。家庭が悪いのだから、という結論を下すことで、子どもの園生活へのなじまなさを説明できれば、保育者としての仕事の埒外のこととして、ほとんど意に介さないか、好ましくない子というレッテルを貼ることで済みます。こ

のような保育者の対応が結果的には子どもの園生活を寂しく緊張の強い状況にすることは明らかである。どうあるべきかなどという論議の上に、日々が成り立っていないのだから。むしろ、そのような論議を呑み込んで、どろどろごたごたを現象しつつ繰り返り広げられるのが、園生活の常であることはいうまでもない。それだけに日常性は自明のことであるだけに、その問題性を如何にして自覚するかが問われている。

第六に、連携問題への留意を取り上げておきたい。そもそも連携は、その内容を明らかにする前に、その概念自体を掲げること、了解されるテーマである。親との連携、保育者同士の連携、そして近接領域の専門家同士の連携など一つの保育実践の現場に限ってみても、連携の様相は複雑に重なり合っている。そのことはいかに連携が複雑な現象を示すものであるか、その解決方向もどれほど多様性に富むものであるかを示唆している。山崖俊子氏も自らの実践的な活動へ関与する経験を通して、

心理臨床そのものの考え方を改めつつあることを回想的に語られた。保育臨床を一つの重要な保育実践研究の分野として成立させることと、近接領域でも特に関連機関としての接点の多い心理臨床との連携については、現状からさらに一歩進んで、保育実践のネットワークを構成させてゆく実例としてその内容を充実させていく必要性がある。

第七として、保育者の自己変革に留意しておくことが保育臨床の成立には不可欠であることを指摘しておかねばならない。子どもと日常生活を営む立場に立つ身近な大人は、家庭の親たちの他には保育者しかない。その場合、子どもと暮らすという毎日のことを、ことさらおげさに考えなくても、日々平安に暮らしていけるだけで十分ではないかという考えもあるだろう。おおまかな意味あいではあるなら、そのような発言に異論はない。けれども、それが子どもの身近なところで営まれる保育者の仕事の現実であるとすると、その点は非常に気になる



り見過ごすわけにはいかない。もちろん実践は保育者一人の力量でまかないきれぬものではない。保育者個人の努力にも限りがある。どうしても保育者たちの協同が基本になる。その協同の形成と運営は、広い意味で人間全体の問題にわたる配慮を必要とする。

ここで、保育現場の人間相互の支え合いを豊かなものにするために、一人一人の保育者が果たす実践的な努力は、まさに臨牀的な営みそのものなのだという考え方をしてみたい。臨牀が本来そういうように、お互いの痛みをわかちあえるような人間の共存の意義を明らかにするプロセスであったのではないか、という指摘は、哲学者中村雄二郎の「臨牀の知」に関する研究からつよく示唆される。臨牀のさまざまな分野の研究とその実践の分野で、専門としての深化拡大の経緯では、その非常に多くの部分において、近代科学における知識に負うところが大きい。そのことによって、中村雄二郎氏の指摘するような近代科学のもつ特質である、普遍主義、客観主義、

論理主義という三つの特徴は、そのまま臨牀の現場ともいうべき保育・教育の現場における子ども理解の主要な骨格を構成してきたとも言えるだろう。好むと好まざるに関わらず、幼児理解・児童理解の主軸は「科学的」という評価信仰に支えられ、現代の人間教育の方向に大きく影響を及ぼしてきたことは事実である。保育者自身の発想を根底から揺さぶるような「知殻変動」がおきるとするなら、近代科学の知へのダウトとしての「臨牀の知」の視点から、実践の見直しをしていくことが子どもに生きる現場においても必要ではないか。

保育臨牀という視点は、保育者のこうした発想の変革と生活革命を可能にする一つのアプローチである。しかもそのことが実践とは遊離したものではなく、実践自体のありようを見直しつつ、子どもの生活と発達を真に支えうる潜在的なキャパシティを園生活に期待できるようにする道である、と信ずるものである。

(大妻女子大学)

婦人宣教師、ミセス・プラインの

## 「おばあちゃんの手紙」(4)

～アメリカン・ミッション・ホームの

創立者の一人～

小林 恵子

★ アメリカ・ミッション・ホームの開設

一八七一（明治四）年八月二十八日、三人の婦人宣教師たちは横浜山手の居留地、四八番館でアメリカン・ミッション・ホーム（亞米利加婦人教授所）を開設した。このホームは混血児の子どもたちの養育と女子教育機関の設置を目的とした家庭組織の塾舎であった。リーダーのミセス・プラインはこのホームの総理を、ミセス・ピアソンは校長を、ミス・クロスビーが会計を担当した。

最初は生徒が集まらず、混血児も日本の少女も来なくて三人は当惑したのであった。当時は切支丹禁制の高礼が日本全国に立てられ宣教師たちをバテレンと呼んで恐れていた時代である。ホームに最初に入ったのは横浜に駐屯していた米国連隊の将校の子どもたちで、母親が亡くなり大酒飲みの父親のもとに残された二人の幼い姉妹であった。「おばあちゃんの手紙」の三（八月二十六日）にはこの姉妹（キャリーとアニー）のことが書かれている。ひどい台風でお祈り会ができなかった朝、幼いキャリーが祈っている姿にどれほど励まされたかわから

ないと記している。

★ ホームの生徒募集広告を書いた中村正直

生徒が集まらず困っていたおり、このホームに滞在し  
生徒募集広告を書いたのが中村正直（敬字）である。彼  
は旧幕の儒者で米國に留学し、西洋文明の根本にあるキ  
リスト教にふれ、極めて進歩的な見解をもっていた。留  
学中、米國の母親の知識や教養の高いのをみて日本の母  
親をかえりみ、女子教育の必要を痛感していたのであ  
る。後に東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学。明  
治八年創立）の摂理（校長）となり、日本で最初の幼稚  
園（国立）東京女子師範学校附属幼稚園（明治九年十一  
月創立）を創立する建議者として尽力した。女子教育、  
幼児教育の礎をききつた恩人である。彼がこのホームに  
滞在したのは『西国立志編』を著して三か月後のこと  
で、静岡学問所に招聘されたE・W・クラークが明治四  
年十月二五日に来日するのを迎えるため横浜に行き、こ  
のホームに十日ほど滞在した。ここで婦人宣教師たちが  
子どもを世話する姿―厳しい躰と真に子どもを愛する態

No 48  
on the Blue

聖米利加婦人教授所 事務手指示

MARY PRUYN  
Superintendent.  
JULIAN CROSBY  
LOUIS PIERSON.

Assistants

馬利普拉 瑪  
如利聖 古羅士倍  
累斯比爾遜

コノ教授所へ、聖米利加婦人伝道會社ニテ設ケルトコロニシテ、日本人、  
四人ノ差別ナク、ソノ父母ノ男子ヲ教育セント欲スルモノアラバ、コノ教  
授所ニテ引受ケ世話ヲ致ストコロナリ。  
三歳以下ノ小兒へ、引受ケザル事。但シ母ナキモノハ、引受ケケン。

凡ソ小兒、入塾ナリトモ、通積古ナリトモ、ソノ意ニ任スベシ。然レモ入  
塾ノ方、小兒ノ為メニ、益アルベキナリ。  
モシ小兒ノ母、衣服洗濯等、ソノ外ノ事マデモ、一切世話ヲ頼ム度バ、女教  
師コレヲ引受ケベシ。

モシソノ父、ソノ小兒ノ來ランコトヲ欲セバ、ソノ小兒親ノ許へ省問スルヲ  
得ベシ。  
モシソノ父母、教授所ニ來リ、ソノ小兒ニ逢ハント欲セバ、午後第四時ヨリ、  
第五時マデノ間ナルベシ。病氣ノ時ハ、何時ニ拘ラズ見舞ニ來ルベシ。

教授及ビ食物、居住ノ費用トシテ、毎月十元ヨリ十五元マデヲ出スベシ。  
通積古ノ者ハ、毎月四元ヲ出スベキ事。

会社ニテ、コノ教授所ノ、百事便利ニテ且ツ有益ノ功効アルベキヤウニト心  
ヲ尽セリ。日本人、外國人ノ差別ナク、懇意トナリタル人ハ、隨意ニ訪問スベ  
シ。コ、ニ居ル小兒ハ、実母ノ如キ親愛ノ心ヲ以テ、万事ニ心ヲ付ケ、世話  
ヲ受ルヲ得ルコトナリ。

ソノ他、委細ノ事ハ、コノ教授所ニ來シテ、教師ニ逢フテ、問ヒ給フベシ。  
余十餘日、コノ教授所ニ寓セリ。コノ三ノ女教師、何モ親切懇篤ナル人  
ナリ。現今小兒四人アラテ、教師ノ世話ヲ受テ居レリ。実母妻子ヲ疑  
ハル、ホドニ、相離和親愛セリ。一ニハ、知慧生長スベク、二ニハ、身体  
強壯ナルベシト思ヘルハ、ナリ。世ノ父母、モシソノ男子ノ事ニテ教育  
ント思フモノ、コノ教授所ニ託シ置カバ、イカバカリカ、ソノ家ニテ育  
トルヨリハ、當カルベキナリ。

明治四年辛未十月  
中村正直識  
NAKAMURA

原文は横浜前百年印刷所所蔵

度―に心うたれ、生徒募集を書いた。彼がよほど心を動かされたらしいことは彼の妻と自分の娘や一族の娘三人をホームに託した事から理解できる。<sup>註1)</sup>

この広告がだされた後、ホームに学びたい人が増え「おばあちゃんの手紙」五にあるように断らなくてはならないほどとなり、建物が狭くて困る状態となった。同年クリスマスには入塾の子どもは十八人（このうち混血児は十四人）通学の女生徒は二十人ほどになった。

### ★ 幼稚園の濫觴

先の広告文をみると、「日本人、外国人ノ差別ナク」世話し「現今小兒四人アリテ」と小人数であるが混血児の養育が始められている。また、「三歳以下ノ小兒ハ引受ケザル事。但シ母ナキモノハ、引受クベシ」とあり、教育と福祉の両面の機能をもつ施設を考えていたことも理解される。婦人宣教師たちの子どもへの接し方が「実母実子カト疑ハルホドニ」に親しみがあったことは、「おばあちゃんの手紙」五の最後に記されている詩からもわかって預けると思う。亡くなったわが子と同じ名前

をもつエディーとアニーの詩は、ホームの子どもを我が子のように思っていて育てている婦人宣教師の姿勢がよくいあらわされている。このホームを津守真氏は「幼稚園の濫觴」と『日本幼児保育史』第一巻で書いておられるが、この施設が人種や貧富の差をこえて開設された幼児保育の先駆的なものであったことは特筆されてよい。また、このホームに深くかかわった人々から幼児教育の草分けとなった先駆者を多く輩出したことは興味ぶかい。日本で最初の私立幼稚園を創立した桜井チカ（桜井女学校附属幼稚園）や児童福祉事業の先駆者、二宮ワカなどはこのホームで婦人宣教師に学んだ生徒たちであった。

### ★ ミッション・ホームの祈禱会と関信三

「おばあちゃんの手紙」五に日本人による初めての祈禱会がこのホームで行われたと記されている。日本の歴史で初めてとあるのは疑問であるが、ホームではジェームズ・バラ宣教師の指導で聖書研究会も開かれ、ここで祈禱会が原動力となり「日本基督公会」（現・横浜海岸教会）が一八七二（明治五）年に設立された。興味ぶ

かいことは、この祈禱会につらなり最初にバラ宣教師から洗礼を受けた人々のなかに安藤劉太郎、のちの関信三の名前があることである。彼は後に東京女子師範学校附属幼稚園の初代園長として活躍し、松野クララの講義の通訳をつとめ、『幼稚園創立法』『幼稚園二十遊戯』などの書を翻訳、著述した人である。彼は当時、仏教の弾正台派遣の耶穌教探索の諜者として婦人宣教師たちと接していたのであるが、後に幼稚園教育に転じた事は興味ぶかい。ホームで子どもたちをみていた事も後の彼の生き方に何等かの影響を与えたのではなからうか。諜者として装って洗礼を受けたことは卑劣な行爲ではあるがそこには時代と立場の違いがあり、後世になって見れば、彼の当時の報告は横浜公会の实情を正確に報道している貴重史料となっていると井上平三郎著『濱のともしびー横浜海岸教会初期史考』に記されている。<sup>註3</sup>

五、アルバニーの第一改革派教会の日曜学校の先生  
と子どもたちへ

親愛なる皆さまへ

横浜 一八七二年一月七日

私たちが日本へ向けて旅だったときには皆さまにお話したように小さい子どもたちのために働くというのが目的で、そのつもりで日本にやって来ました。でも今は、神が私たちに与えて下さる仕事をなんでもしようと考えています。いろいろと仕事は山のようにあるのですが最初の目的とは少し違ってきたのです。神が本当にこれらの仕事をするように私たちに命じておられるのかどうか確信がもてなくなるときには不安になってしまいます。子どもたちのための仕事以外の仕事は次々と私たちにおおいかぶさってくるのです。このホームを始めてまだ四か月しかたたないのに、今では信じられないくらい多くの気の毒な異教の人々が英語を教えてほしいとやってきます。私たちの一人（ミセス・ピアソンをさしている）は日本語がかなり上手になり、英語と日本語をちゃんぽんに使いながら彼等に教えることができるようになりました。三十人以上もの男の人や女の子、少年、少女たちが毎日のように来ますし、それと同数以上の人々を無理にでも断らなくてはなら

ない状態です。聖書について学びたいと言って来る人々を断るのはとてもつらいことです。でも、人間の力には限界があつて私たちの仲間のひとり、ミス・ピアソンがやっている以上の仕事はとてもできません。

そこで、私たちみんなが感じていることは、ここで最もやりたいと思つていること、つまり私たちに最もふさわしい仕事を女性と少女の教育に限つたらどうかということ です。

それに、私たちのホームの建物は大きな学校には全くむいていないのです。そこでこのさい、より良い仕事をするためにもっと大勢の生徒が収容できる施設が欲しいのです。親愛なる皆さん、是非この目的のために援助していただきたいのです。私たちが必要としている土地や建物を手にいれるためには莫大なお金が必要です。でも私たちが願つているような施設を手に入れることができれば現在ここで行つているよりもずっと多くのことが出来るのです。今のところ、何人かの少女や若い女性からの申し込み

があります。が部屋が無いため断らなくてはならないのが現状です。

それから、私たちがもっと必要としているのは教師なのです。日本語を学ぶことのできる婦人宣教師を何人か派遣して欲しいと願つています。日本の政府は近々、法律を改定し（キリスト教禁制の高札を撤廃することをさす）、人々が罰せられることなく学べるようになりそうなので、その時に備えて人々を教えることができるよう準備しなくてはなりません。政府も法律改正は早晚やらなくてはならないでしょう。人々は現在の法律が間違つてゐることを感じており、もうこれ以上は我慢してゐないでしょう。大胆で勇氣のある人々は現状を無視して、正しいありかたを求め歩もうとしています。でも、まだ多くの人々は臆病でひそかにその時が来るのを望みながら待つてゐるのが現状です。宣教師たちやクリスチャンの人々は宗教が自由（明治六年二月、全国キリスト教禁制の高札を撤去）になることに備えて準備することがとても大切だと感じてゐます。この

ためにより多くの宣教師がこちらに来て日本語の勉強をしておく方がよいと願っています。それから皆さんたちは是非お伝えしたいことがあります。教週間まえから日曜日の夜に私たちのホームに集まってくる数人の日本人によって祈禱会が始まったことです。最初は讚美歌を習うために集まったのですが今では一緒に祈禱をし熱心に励ましあうようになりました。これは日本の歴史からみて初めてと思います。しかも、そこには日本の女性も出席しています。

また、忘れてはならないのは、このホームに毎日学ぶために来ている人々はみんな「主の祈り」を学び、この学校が始まる時に唱えるのです。もっと良いことは何人かの生徒は彼等のためにお祈りの言葉を宣教師に書いてもらいそれを日本語に翻訳して自分の家で祈りを捧げていることです。

ここで皆さんたちにこのホームで私たちと一緒に暮らしている可愛い幼い子どもたちのことをお話ししたいと思います。今、子どもたちは五人います。

この子たちは救い主について何も知りません。お祈りや讚美歌や聖句について教えられたことがなかったのですが今では口にしたして言うようになりました。それを聞くことは私にとって大変嬉しいことです。きっと皆さんも同じように喜んでくださると思います。このホームに入ってからまだ三か月にもならないのにこの小さな子どもたちが「There is a happyland」や「Jesus loves me」（主われを愛す）の讚美歌を歌うことを覚え食事のとき、お祈りすることに参加しているのです。毎日、朝と晩、子どもたちは短いお祈りを唱え、そのうえ「天にまします我等の父よ」（主の祈り）を一生懸命に唱えようとしている姿をみたら皆さんたちも私たちと同じように神を讚美せずにはおれないと思います。

先日も私たちの小さな女の子が、エディーという男の子が自分たちの部屋で声をだして一緒に祈りをしようと言いだして毎朝、順番にお祈りしていることを話してくれて私はとても嬉しくなりました。

故郷、アルバニーの我が家の墓地に小さな墓石が

あって、そこに亡くなった子ども “エディとアニー” の名前が刻まれています。私がここではじめて面倒をみることになった二人の異教の混血の子どもたちが偶然にも同じ順序で同じ名前がなづけられていることは不思議なことではありませんか。この子たちは私の愛する子どもたちなのです。

私の亡くなった愛するふたりの子どもはもうすでに私の世話を必要としない学校（天国）へいきました。そこでは、キリストご自身がすべてを支配し守ってくださいています。

神がこれらの小さな子どもたちを養育するよう、私に贈って下さっているのだと信じます。この子どもたちが最初に習った英語の言葉 “God is Love”（神は愛なり）を何度もくりかえして発音するのを聞くことは私にとって大きな喜びです。

親愛なる皆さま、私がこれまで述べてまいりましたことは十分おわかり頂けたことと思います。この

国の人々に神の福音を述べ伝えること、神を恐れ、神の愛を知るため大勢の人々がここで学ぶことができよう、ふさわしい建物を建てることは私たちの責任であり特権です。どうか皆さまに判っていただきたいのです。

主に仕え、いつも皆さまと共にある

メアリー・ブライン

（国立音楽大学）

#### 註

(1) 『横浜共立学園120年の歩み』横浜共立学園 一

九九一 43頁

(2) 津守真「外国人の始めた『亜米利加婦人教授所』」日

本保育学会著『日本幼児保育史』第一巻 フレーベル館

一九六八 44―49頁

(3) 井上平三郎著『濱のともしびー横浜海岸教会初期史

考』キリスト新聞社 一九八三 173頁



庭の番人ゝあきゝ

## 彩り・別れ

青葉の季節が終わり、ちょっとひんやりした風と、おいしい空気を楽しめる日が多くなってきました。あんなに沢山の汗をふき出させていた暑い日は、遠い昔のような気がします。

濃い緑の葉が重なり合うようにして枝を埋めつくし、そこで、一緒に遊んでいた緑の風

土橋 光子

はどこへ消えたのでしょうか、もしかしたら地球のどこか、彼等を待っているところへ引越したのかもしれない。

その後へ、落葉樹の葉を染めるために、沢山の色を背負った花青素・爺さんに乗せて北風の車がやってきました。遠い昔、私の学生時代に、化学変化の様子を童話にして教えてく

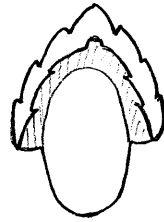
ださった恩師を懐かしく思い出します。

「北風が吹きはじめると頃の寒く冷たい夜に、カセイソ爺さんがやってきて、一本一本の木に登り下りしながら、丁寧に葉っぱの色を塗り変えていくのです。」と、その季節がきますと、この夢のように美しい化学変化の様子を子どもたちに語り聞かせたくなります。落葉樹の桜・海棠・花木・柿・梅・石榴・榎等が小さい庭で、常緑樹たちと共に各々居場所を得て立っています。毎年このお爺さんのお世話になる様子を見て廻るのも楽しみのひとつです。一枚の葉でも葉肉の薄い辺から変色していくようです。花木木は花も葉も実も見事な彩のシヨウを見せてくれます。桜は見事な花でした。葉もよく繁り、紅葉のときはさぞやと期待したのですが、大木になり過ぎて、近くではバツとしません。この頃から日課の落ち葉掃きが忙しくなりはじ

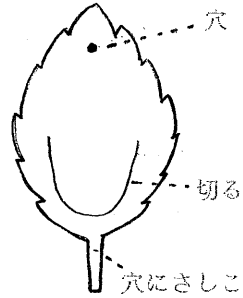
めます。せめて向こう三軒両隣ぐらの道はと、4 m幅の道路を往ったり来たりしていますと、朝露にぬれ、陽の光の中で輝いている一枚の落ち葉を見ました。「きれい！」と声にならない思いは掃く手を止め、片寄せた葉の前に屈みこんでいました。そっと拾い上げて陽にかざして見ますと、原色から中間色まで、虹のもつ色を全て見せてきています。

落ち葉の季節は、四月の浮き立つような華やぎはありませんが、十月の半ばを過ぎる頃から葉は散りはじめます。後には裸木が残り、寒い日がすぐぎますよと木枯らしが泣きたてるだけです。朝はめっきり冷たくなりました。竹箒の柄が手の平に吸い付くような気がします。風に誘われて散り急いだ沢山の葉の中に、実に見事な色に着飾ったものが有りました。手にとった一枚で草履を作ってみました。誰が履くのでしょうか。一足、二足と大

履草の葉



でき上がり



きざや色をあわせて作りためていきますと、「あっ！ おばあちゃんおはよう、なにしているの！」「あら、おはよう！」と作り立ての品物を見せると、「わあ、かわいい、ほしいほしい！」「わたしにも、」「わたしにも！」と三人三様の抑揚を言葉にこめて、立

ち止まりました。あわてて側溝のふちに並べて見ますと、各々が手にとって、「きれいなぞうり！」後から追いついてきた子たちも、「わたしのも作って！」さあ掃くところではありません。草履屋さんは大忙しです。おくれた子は集められた葉の中から、気に入った葉を捜して小刻みに足ぶみをしています。待ちきれなくなったのか「私自分で作る、おしえて！」「はい、じゃ私と一緒に作って見てね！」片方が出来上がると「ありがとう！」「片方だけで？」「私も一ついい！」自分で作りはじめた子がいたので、最後の子には、「はい、両方で一足！」と渡してやりますと、「ありがとう、今度、自分で作る、あした教えて！」と、思い思いの言葉を残して学校へ向かって出発です。「気をつけてね、後で作ってここに置いときます！」虫くい穴や、ほくろがなく、形と色のよいのを

二枚一組に揃えて集めると縁側に置き、家事を済ませて再び草履作りです。人数より、一、二足余分に作り、はこべの敷物の上に並べていますと、通りがかりのおじさん方が横眼で見えてニヤリ！ 夕方犬の散歩に通る坂下の奥さんが「何をおつくりですか？」「いたずら、子どもたちと約束したものですから……」翌朝少しわくわくして、はこべの敷物のところを一番に見ますと、作品は全部売り切れていました。

此のような毎日が桜の葉の散る間続きます。美しく紅葉した葉っぱなら、どの木の葉でもいいのではと、真紅になって散った花木の葉で作ったのですが、薄く柔らかで、形も円に近く思うようではありません。少し堅くて楕円形の桜の葉は、鼻緒もしっかり立ってほんとに履きよさそうです。残り少なくなった落ち葉を掃き集めていた数日後の朝で

した。「お早うございます。何時も子どもがお世話になりました！」と挨拶をいただき、吃驚して手を休めますと、皆の後の方からそっと覗いて最後まで待ち、貰うとワツと走っていく一番小さい女の子が、母親の後ろに半分かくれる様に立っています。「お早うございます。私の方が遊んでもらっているのですよ！」と笑いますと、「家ではよく話すんですよ、おばあちゃんに教えて貰ったのなんて言っ、自分で拾ってきた葉で私に作り方を教えるのです。」「あらあら、じゃお母様も草履屋さんになれますね！」「はい！どうぞいろいろ教えてやって下さい！」この子は待つ間に、いくつも作るのを見ていて覚えていったのでしょう。でも私が作ったものほしいのです。小さい声で「学校の先生にも教えたの、学校にも桜があるの！」話がはずみます。この子の話が散った葉っぱたちにも

聞こえたらいいなとおもいました。

数日後、梢に一、二枚ずつ残っていた葉が夕日に染まって西風にゆられていました。明日はお別れになるかもしれません。遠くへ旅立ってしまうでしょう。翌日は大変冷たく寒い朝でした。少し早起きし、外に出て空を見上げますと梢は空っぽ、ゆれていた残りの葉は青木の垣根の上で最後の彩りを見せてくれました。葉っぱたちは子どもと沢山遊んで、土の母さんのところへ帰ったのでしよう。

さよならをしたので、同じ葉には会えないけれど、新しい生命を貰って生まれてくる

葉っぱと、子どもたちに、又来年あいましう！

(元・武蔵野相愛幼稚園)



※ 7月号43頁上段14行“自分に触る”は“自分に解かる”です。お詫びして訂正いたします。(編集部)

\*\*\*ある日の育児日記から\*\*\*

\*\*\*\*\* (22) \*\*\*\*\*

佐藤 和代



二人目の子は、ずいぶん手抜きの子育てになる  
 …と、よくききます。我が家もしかり。有は、服  
 はお下がりのピンクばかり、写真が少ないのでア  
 ルバムもない。育児書もほこりだらけです。  
 有には申し訳ないと思っていたのですが、手抜  
 きのツケは、私の身にもふりかかってきました。  
 どうもおっぱいがかゆいな、と思っているうち  
 乳首に何か白いものがたのです。形も痛みも  
 ちょうど口内炎のよう。しばらく放っておいたの  
 ですが、痛みは増すばかり。仕方なく、圭に授乳  
 していたときお世話になった、母乳マッサージの

先生のところへ行ってみ  
 ました。  
 先生は私の乳首を見る  
 と「カビね、これ…カ  
 ビの一種だったのです。  
 そういえば、乳首の消毒なんてしたこともない。  
 (圭のときは一応してました) おふるも、二人の  
 子をいれるのにてんてこまいで、自分の体なんて  
 洗えない。ぐしゅぐしゅにぬれた母乳パットを、  
 一日中つけっぱなしのこともあったし。これでは  
 カビもはえるというものです。

一週間ほどでカビは消え  
 ましたが、赤ちゃんの口には  
 いるものなのに、あまり  
 に無神経だったと、反省し  
 きりです。有、ごめんね。  
 おっぱい、おいしくなっ  
 たでしょ?!



このごろよくわかるのは  
 「お姉ちゃんぞっくりね！」

## 遊びのスクランブル交差点 (5)

### 文字のある遊び おみせやさんごっこ

仲 明子

◇ 文字のある遊び おみせやさんごっこ

おみせやさんごっこは、昨冬三か月の間、毎日のように遊び続けられた。春になると、また、神社の境内や庭で遊ぶようになっていった。今年（平成四年）の冬は暖冬だったので外遊びが途切れることなく続いた。

けれども、この一年を通して、外遊びができない日に、我が家の六畳に二、三人も集まると、早速、おみせやさんごっこが始まるのだった。

私はその傍らにあって、どうしてこの遊びが一年の間、子どもたちに遊ばれ続けたのだろうと、不思議に思っていた。

そんな今年の一月、Nがれすとらんの「めにゆう」を自分で書いた。

C いらっしやいませ なににしますか。ああ、メニューは？

N それが、なくなっちゃったの。

C おばちゃんにかいてもらおうよ。

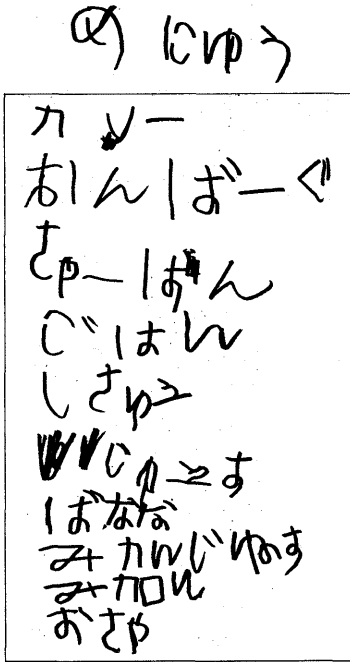
N いいよ。わたしがかくから。

書けない「ゆ」などは私が掌に書いたのを見て書き写す。でき上がったその紙を二つ折りにして、その表に

「めにゅう」と書く。(図1)

私はこのでき上がった「めにゅう」を見て、びっくりした。

ひらがなが十分に書けるとは言えないNが、遊びに必



▶ 図1. Nのめにゅう(H4. 1)

要なメニューを私に頼むのではなく自分で書いたことに、また、外食をあまりしたことのないNが、書いた紙を二つ折りにして表に「めにゅう」と書く「形式」を、何かの機会に知り、自分なりの「メニュー」のイメージを持っていったことに。

そのとき、私は、この遊びが六畳で始めて遊ばれた「文字のある遊び」であり、その中で彼らが次第に「書くこと」を楽しむようになっていった遊びであることに、気づかされていた。

では、彼らは、この遊びにどのように文字を取り入れ、「書くこと」を楽しむようになっていったのだろうか。

それをまず、この年頃の子どもたちが、暮らしの中で「書くこと」とどのようにかかわるようになっていくのかということ、我が家の第一子Lと第二子Nの兄妹について探ってみようと思う。

そして、それを手がかりに、彼らがこの遊びの中で「書くこと」をどのように楽しんでいるのかを探ってみ



たいと思う。

そうすることで、なぜこの遊びが一年もの長い間、彼らに遊ばれ続けたのかを探ることもなると思う。

◇ 暮らしの中の「書くこと」に探る

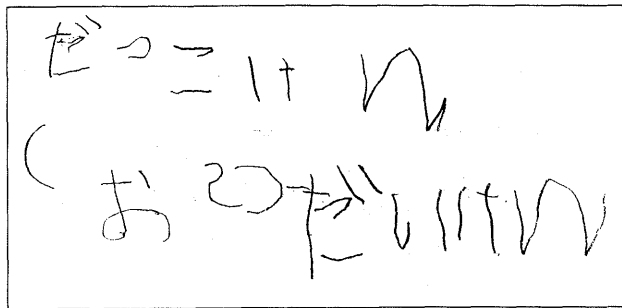
(1) 必要にせまられて書く

だっこけん 夕食後、L（六歳半）とN（四歳三か月）が私の膝を取り合っていた。私がおざけて、「膝に乗る人はだっこけんを下さい。」と言った。Lはすぐにマーガリンの空箱を持って来て、その一部を切って「だっこけん」と書いて指輪のように丸めたものを作った。それは一回だっこをもらった後で一回おてつだいをします（Lはその日後で肩をたたいてくれた）というものだった。私の膝の上でそれを見ていたNは、突然激しく泣き出した。そして、「私は字が書けないから、だっこけんができない。」と言った。

そのとき私は、兄のLには今までして来なかった、

「文字を書くことを教える」必要を感じていた。

私は一瞬ためらった後、膝の上にいるNの手を取って一緒に「だっこけん」を作った。それはメモ用紙を二つ



▲図2 Nのだっこけん（H2. 秋）

折にして、表に「だっこけん」、裏返すと「おてつだいけん」と書かれていた。(図2)

Nはそのできばえに満足していた。そして、書くことを随分身近に感じている様子だった。Nはひらがな(お手本)を書き写すことで自分も「書くこと」ができることに気がついたのである。

その日から、Nは一生懸命に「だっこけん」を作った。なんとか作ったそれを一枚持ってやって来ては私の膝に乗り、すぐ降りては肩をたたいてくれた。すでにNは私の膝に乗りたくて券を作っているのではなかった。

Nは券を作ることを楽しみ、文字が書けることの威力を確かめていたのである。

このように、日々暮らしの中のおもしろいことは、たいていLが考え出すのであるから、そのLと互してやっていくには、Nは背伸びして自分の能力を精いっぱい発揮する必要にせまられているのである。

必要がある——見ていて自分も作りたいと思い、その券が無いと膝に乗れないと思った——から精いっぱい頑

張ったら書けたのである。その後から「書く楽しみ」はやって来たのである。

結果として、Nは券に使われているひらがなは、曲がりなりにも書き写すことができるようになった。

私はNの精いっぱいその姿に、「書くこと」の始まりは、必要にせまられて一字一字書き写す——まねをする——ことなのだと改めて知らされた。

## (2) 機が熟して書く

はたけでとれたおいもです——降園のとき、今日いもほりをしたこと、カゴに入っているのがそのおいもであることを先生が話された。早速、カゴを取り囲んで、その大きさのみごとなことに母親たちの話はずんでいた。その私の耳元で「おかあさん、あれ、ぼくがかいたんだよ。」とLがささやいた。「え——。」と驚いた私は、近づいて、今度はそのカゴに張られた紙を見た。

おもいのカゴを運んでいたLたちに先生は、「書けたら『はたけで……』と書いて張っておいて。」と言われたと言う。それは一年保育の川崎市立I幼稚園に入園してまもなくの頃で、Lはすでに六歳になっていた。

それまでのLは、絵本や広告の紙の中からいくつかの文字を模様や絵とまねるように別の紙に書き写し、私に見せてくれていた。そんなLにとっては、ひらがなだけでなく、数字もカタカナも漢字もアルファベットまでもが、同じように文字であり興味の対象だった。

だから、私はLがいくつものひらがなを書けることも、自分の名前を漢字で書こうとする意欲があることも



知っていた。

けれども、私たち大人との暮らしの中でも、妹のNや友人T・Yとの遊びの中でもその日に先生がしたような要求を、Lにした者は誰もいなかった。そのときまで、Lは「文字を書く」必要のない暮らしの中にいた。

だから、私は、Lの中で、文字を使いこなす力や興味がそれほどまでに育っていることに気づいていなかった。その日、私はLがひらがなを伝達の道具として使いこなせるまでに機が熟していたことに驚かされた。

このように、Lにとって幼稚園生活の始まりは、文字のある生活の始まりとなった。

十分に機が熟していたLは、文字を使いこなすことで「書くこと」を楽しみ始めた。

### (3) 大きくなったしるしとして書く

朝の仕度メモ N (四歳八か月) はいよいよ週二回の自主保育に通うことになった。その話を私の横で聞いていたNは、

1 はみか  
2 かあらい  
3 といれ  
4 はんかち・ちりび  
5 ついた

▲図3 Nの朝の仕度メモ(H3.4)

「それなら用意をしなくちゃ。」と言うが早い、メモ用紙を持って来て何やら書き始めた。(図3)

それは、Lが一年前に冷蔵庫の側面に張ったものと、そっくり同じだった。

Lは登園の仕度、がスムーズにできるようにと、自分で考えてメモ用紙に五つの仕度の項目を書いた。それから毎朝、「一番終わったよ。」「今度二番。」……「全部終

わったよ、お母さん。」と賑やかなLの声が聞かれた。

Nはそれからの一年間、毎朝そのメモを見ながら仕度をするLの傍らで過ごした。

私はNのメモを見たとき、Nが、兄の通う姿に大きくなって通う自分の姿を重ねていたのだと気づかされた。

そこには、大きくなって通園するときには私もあずるのだというNの思い——憧れ——を見ることができよう。

Nは一年前の「憧れ」を実現するために、メモを書いたのであった。

それはLのように、機が熟して書いたのではなかった。背のびして自分の能力を精いっぱい発揮して、それでも足りない分は母に助けってもらって書いたのだった。

やっと自分にも通う所のできたNは、兄のように大きくなったしるしとして、兄と同じように自分も朝の仕度メモを書いたのである。

◇ 「書くこと」を楽しむ様子を探る

(1) 大人から形式を取り入れる

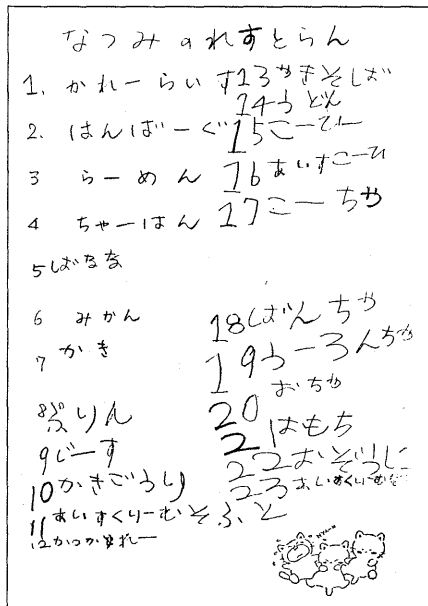
Oのめにゅう CとNに頼まれてノートに各々のメニューを書いていると、Oが今度はOのメニューを書いてほしいとやって来た。Oの言う順に四番まで書いたとき、Oは私からノートと鉛筆を受け取って、自分で続きを書き始めた。(図4)この三人のメニューを書いたノートは、それ以後、れすとらんが開かれるたびに準備され使われた。

Oはレストランにはメニューがあり、それにはそのお店で出す食べ物の名前が書かれていることをすでに知っている。

かれーらいす、はんぱーぐ、らーめん、チャーはん、まず、Oが言ったのは、今までにレストランで食べたもののなかのだろう。

これは、このメニュー(という形式)が大人との生活から遊びに取り入れられたものであることを示している。

◀ 図4 Oのめにゅう (H.2. 12)



けれども、それに続いてOが自分で書き並べたのは、それよりももっとOの身近にあると思われる食べ物——果物、デザート、飲み物、それに最近食べたと思われるおもちゃやおぞうに——であることに気づかされる。メニューを作っていたOは、いつの間にか知っている食べ物名前をつぎつぎに並べて書くこと——食べ物づくし——を楽しんでいたのである。こうして、「Oのめ

にゆう」はでき上がった。

ひらがなを駆使して食べ物づくしを書くこと——これは、すでに機が熟したOに生まれた「書くこと」を楽しむ姿であろう。

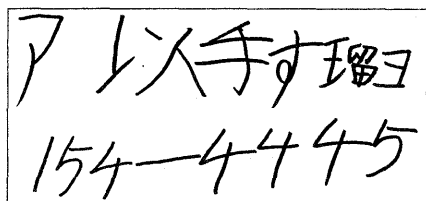
私はOのメニューづくりに出会ったことで、大人から取り入れた「形式」にそって書くことを楽しむ過程に生まれた、もう一つの「書くこと」を楽しむ子どもの姿があることに気づかされたのである。

## (2) 形式を共有する

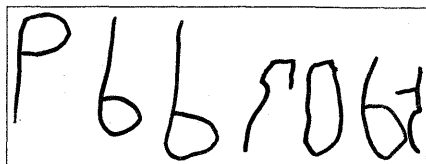
### 電話番号

Hがりょうこうセンターを開いて電話番号を書き込むと、その日からしばらくは電話番号を書くことが遊ばれた。一月ほどたったある日、Lが台所にいる私の所へ「広告でーす。」と一枚の紙を置いていった。入れかわりNがやって来て、「広告でーす。これ銀行の電話番号。」と二つ折りにした紙の表に数字の並んだものを置いて行った。(図

5)



A 以手す瑠日  
154-4445



P 66 7067

▲図5 L—上段とN—下段の広告  
(H4. 2)

この日、H(小一)は紙にお店の名前と一緒に電話番号を書き込んでみんなに知らせる(後の広告)という形式を大人の生活から取り入れた。

横で見えていたLとNは、早速まねをして、持って来た紙に、自分たちの名前と電話番号を書き始めた。

私は、その場に「ずるーい、まねをして。」という声を予想した。けれども、そんな声が聞かれることはなかった。

私は、そこに、彼らが「書くこと」——自分の番号を決めること、それを書き込むこと——を楽しんでいる姿を見た。

そのとき、私はまねをしたのが形式であり、知らせる内容——番号はひとりひとり違っている——ではないことに気づかされた。

彼らは、友と同じことをしている——形式を共有している——一体感をも楽しんでいた。

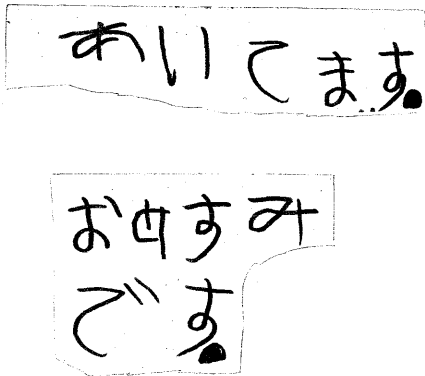
さらに、Lが「広告」という形式を取り入れたことで、遊びの場は台所にまで広がった。

このように、この遊びに文字があることで、彼らはまねをする——形式を共有する——ことを楽しむことができ、それが遊びの場に広がることで「書くこと」を楽しむことを共有でき、さらに、遊びの場も広がることができた。

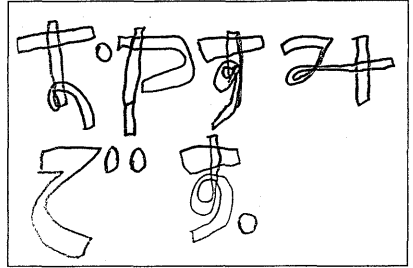
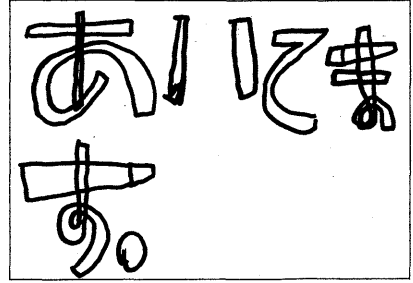
(3) 見ることで刺激される

あいてます N (四歳児) が遊びの中で始めて自分で看板を

書いた。それは鉛筆で弱々しく書かれてはあるがテーブルの前に張られた。Nはその日から遊びの始めには看板を「書くこと」を楽しんでいた。始めは書いた文字の大きさに合わせて紙の方を切っていたが、(図6) やがて紙に合わせて字の大きさを調節できるようになった。そして、一ヶ月たったある日、Lが新しい看板作りを楽しんでいる傍らで、Lと同じように中抜き字で看板を書くことに挑戦で

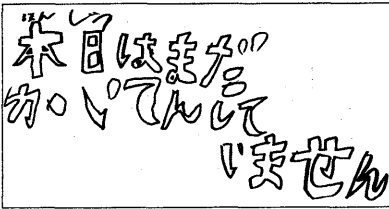
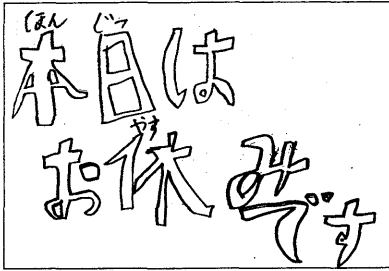
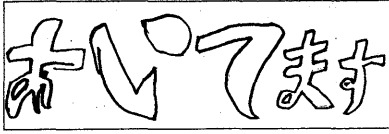


▲図6 Nの看板 (H4. 1)



▲図7 Nの看板(H4.2)

▲図8 Lの看板(H4.2)



きるまでになった。(図7)この日、Lが書いた「あいてます」はNのまねをしたものだった。(図8)この日、LとNは互いに刺激され合っていた。

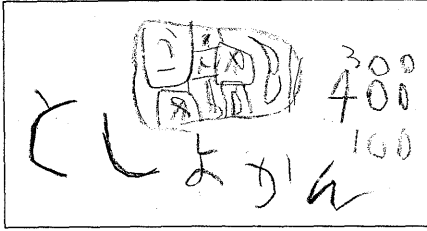
兄の傍らで兄と同じように看板を書くことができた。それは——早く兄のように大きくなりたいNにとって——大きくなったしるしであり、憧れの姿でもあった。

Nはこの一年の間、兄たちの傍らで遊び続けて——看板を私に「書いてもらうこと」で、それらを「見ること」で刺激され続けて——ついに、それを実現することができた。

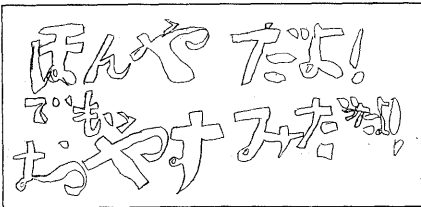
私はNのその姿を見たとき、「見ること」、「書いてもらうこと」でこの遊びを楽しむ姿も、自分で「書くこと」で楽しむ姿も、そのどちらも、この遊びを楽しむ子どもの姿であると気づかされた。

そして、この文字のある遊びが、その両方の姿の混じって遊ぶこと——そのときどきの自分の楽しみを追求





▲図9 Tの看板 (H3. 冬—上段、春—下段)



▲図10 Lの看板 (H3. 秋)

すること——のできやすい遊びであることを改めて知った。

\*

入学をはさんだこの一年は、彼らが「書くこと」ができるようになりそれを楽しむようになっていった一年でもあった。(図9・10)

私はこの遊びが、彼らの中に育って来た「書くこと」への関心をマイペースで追求することができ、「書くこと」を楽しむことを共有することができる遊びだったから、一年もの間遊ばれ続けたのではないかと思っていた。

(舞々同人)

今月は五月にお茶大で行われました、第45回日本保育学会で、研究奨励賞を受賞されました榎沢良彦先生と浜田美智先生に、論文のご紹介をいただきました。又、企画シンポジウム「保育臨床の視点から園生活を考える」について企画・司会の大場幸夫先生より報告していただきました。雨ではじまった大会でしたが、全国から多数の方々に参加され、熱心に発表に耳を傾けていらっしやいました。保育学会からの報告は、次号もご紹介する予定しております。

\*

娘はこの春から中学生となり、毎日が新しいことばかり。新しい生活への好奇心と驚きで、学校の様子を興奮気味に詳しく私に話してくれます。

娘の学校では、朝会の時、司会の生徒が「今日は〇〇さんのお誕生日です」と紹介し、クラスの皆からお祝いをしてもらうそうです。中学生にもなって随分可愛いこと……と思っていたのですが、後

から、そういえば、この子が保育園の時もそうだった」と思い出しました。

園児数100名足らずの普通の公立の保育園でしたが、園長先生のお考えで、毎月のお誕生会ではなく、一人一人の子の実際の誕生日にその子だけのためにお祝いをして下さるのです。その日のために園長先生がまるで本物のようなデコレーションケーキを紙で作って下さり、そのまん中には大きなロウソクが立っていました。その日は朝から一日、その子が主人公です。給食やおやつの際はもちろん、遊びの中でも、その子が望めば、何回でもケーキのロウソクに火がともされ、フーツと吹き消したり、パースディソングを歌ったり、本当に一日中、何十回も楽しんでる子もいました。

誕生日は誰にでもありますが、どの子にとっても特別な日なのです。それは保育園でも中学校でも同じことで、一人一人が、いかに大切に考えられていたかをあらためて知らされました。

(K)

## 幼児の教育

第九十二巻 第十号  
(一九九二年十月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成四年十月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五―一―

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三―一

振替口座 東京九―一九六〇

電話〇三三三二九二―七七七八―

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

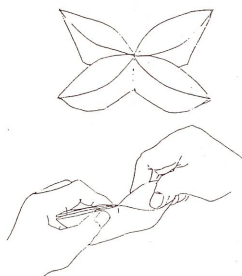
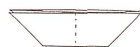
# おりがみあそびシリーズ〈全2巻〉

子どもの夢を育てる折り紙を保育に生かそう。四角が三角に、鳥に蛙に変身、幼児も今日から紙の魔術師!!

## ①やさしい おりがみ

川並知子・著

とり、さかな、うさぎなど伝承折り紙の中からやさしい折り紙を選びました。子どもと母親や保育者とのふれあいの場を提供してくれる折り紙は、ちょっとしたことばかけによって子どもの信頼関係が育ったり、イメージを豊かにすることができます。

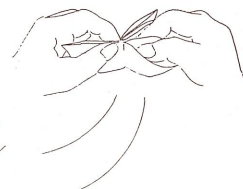
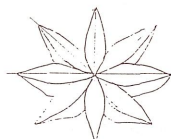


## ②たのしい おりがみ

川並知子・著

それぞれの作品には、だれにでもわかる色刷図説がついていて、本を見ながら折り方を進めていくことができます。また、折り方の発展例が大きく取り上げられていて、創造する楽しさを味わったり、表現力を養うことができ、友だちと話し合いながら遊ぶことは友だち関係を育ててくれます。

きくのはな



A4 変型判・32頁・折り紙付・各定価 850円(税込)

全2巻セット定価1,700円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

# なぜ

# ごっこ遊び？

## 幼児の自己世界のめばえとイメージの育ち



ごっこ遊び誕生の秘密！ そのめばえと育ちの姿、  
かかわり方にアプローチ。

- ・ごく幼い子どもの何げない行為の意味を探り、かかわりのポイントを示します。
- ・人とのやりとりを通して育つイマジネーションと、それに支えられて展開する「ごっこ遊び」の発達的な意味と在り方を具体例でわかりやすくのべています。
- ・幼児理解が深まり、保育がますます楽しくなります。

今井和子・著

A 5 判・216頁・定価1,600円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

# フレーベル館